■□■

夜の帳が全ての物を闇に包み込む深夜。
静まり返った夜空では、星々が輝いている。
太陽が沈めば、まだまだ寒さが堪える季節だが、室内の温度は普段以上に上昇していた。
そんな中、何の前触れもなく、唐突な疑問を投げかけたのは滝ノ上だった。
「嶋田さ～、お前のズリネタって、相手は男？それとも女なの？どっち？」
あまりにも突拍子な質問に、嶋田が目を丸くするのは当然だった。
質問内容がようやく頭に入ってきた時、身体だけでなく思考さえも機能停止しそうだった。
しかし、反射的に口元から零れ落ちたのは、荒い息混じりの素っ頓狂な声だった。
「はぁ？」
質問の真意が読めずに困惑する嶋田に、更に追い立てるような滝ノ上の質問が、容赦なく飛んでくる。
「なぁ、男？女？どっち？」
呆れるよりも先に怒りを充満させた嶋田は、瞬く間に険悪なオーラが沸き上がっていく。
予測不可能な行動や言語には慣れているが、それでも時折、場外ホームランのように逸脱する思考に、辟易される。
「なんだよ急に・・っ～かさぁ、この状況でそれを聞くワケ？」
最低最悪だと言いたげに、嫌悪感を丸出しにする嶋田を他所に、滝ノ上は嬉々とした顔で声を弾ませていく。
「いいじゃ～ん！教えてよ～誰にも言わねぇ～からさ♪」
楽しんでいるのか、からかっているのか分からない声色で話を続ける滝ノ上に、辟易してしまった嶋田から怒声が飛んでくるだけだった。
「ヤる気がねぇ～なら！今すぐ抜けっっ！」
背中越しに叫んだ途端、強引に上半身を持ち上げようとする嶋田だったが、急激な動きにダメージを受ける羽目になった。
「くっっっっ！」
直前までの濃密さは、思考が冷えるよりも遅く、強烈な刺激と圧迫感に喘ぐように呻いた。
緩々と元の体制に戻るしかない嶋田は、必死に息を整えつつも、次の算段を巡らせていた。
２人がいるのは、同じベッドの上だった。
数分前までは確かに存在していた甘ったるい空気は、滝ノ上の突拍子もない質問のおかげで、掻き消えてしまった。
それでも、中途半端のままの行為に、熱を帯びた体は冷めるどころか、焦れるばかりでもどかしい。
自分の下で荒い息遣いを繰りかす嶋田が色っぽくて、思考が逸れていく滝ノ上は、こびり付いていた疑問を薙ぎ払った。
「まぁ・いっか」
諦めたように呟いた滝ノ上は、嶋田の膣へ突っ込んだままの性

器を僅かな動作で元に戻す。
「ふぅあ、あっつ！」
軽く跳ねる息遣いと背中を宥めるように唇を落とした滝ノ上は、背中越しに伝わってくる怒りが収まらない事に、苦笑した。
奥へと侵入を果たしている性器は、脈々と血を打っているにも関わらず、2人を包む空気は寒々しかった。
満足に動けない中、嶋田の唸り声に近い呼び声が炸裂する。
「たつつぅ～っんっ！」
失敗したと思いつつも、伊達に幼い頃からつるんでいるおかげで、対応策も万全だった。
ここで素直に謝ったところで、逆効果にしかならないことを知っている滝ノ上は、判断に迷いつつも最悪の事態だけは避けたい。
しかし、問答無用で中断しようと腕に力を込めた嶋田は、渾身の力で滝ノ上から抜け出そうとする。
ずるりと締め付けが引いていく感触に、咄嗟に嶋田の腰に腕を回した滝ノ上は、半ば強引に引き戻していく。
「はぅぅつ！」
追い縋るように突き上げられた刺激に、思わず漏れた嬌声が、滝ノ上を煽るには十分すぎる。
そして、流れるような手つきでで太ももを抱え直した滝ノ上は、軽く腰を持ち上げると、更に奥へと身を沈めていく。
「ちょう、待っ、て」
抵抗する間もなく、更に奥へと差し込まれた熱い塊に、大きく身体を震わせた嶋田は、腕を支えていた力が霧散した。
力尽きたように枕に顔を埋めた嶋田は、先ほどと大差ない格好に戻っていた。
悔しさのあまりシーツを握りしめた時、背後から覆いかぶさるように重なっていた瀧ノ上が、ゆっくりと上半身を起こしていく。
そして、怒りと蟠る快楽の狭間で、頭が沸騰しそうになる嶋田を他所に、肩甲骨に軽いキスを落とした滝ノ上は、苦笑交じりに呟いた。
「わりぃ、聞かなかったことにして」
力なく撤回する声が、別の意味で気掛かりになりそうだった。
翻弄させられる言動は、怒りで靄のかかった脳内では、本来の思考もままならない。
混乱する脳内を抑えようとした瞬間、再び滝ノ上が新たな動きを始めていく。
「ちょっ！・・・急に・・動か、す・・んあっ！」
徐に再開された行為に、頭で考えるよりも先に、文句に近い言葉を吐き出すのが精一杯だった。
ますます混濁していく思考に翻弄される嶋田は、次第に快楽の渦に引きずり込まれてしまった。
「ふぁっ、っぁあぁっ！」
突き上げられるスピードが加速し続ける中、考える事を放棄せざるを得なくなった嶋田は、妖美な肢体をのけ反らす。
怒涛のように押し寄せる容赦ない刺激に、呼吸することも忘

れそうになり、シーツを強く握りしめる。
激しく打ち付けられる熱波が、体中を貫いていく中、次第に施行まで朧げになっていく。
そして、無意識の内に口元から零れ落ちていく、淫らな喘ぎ声を止める事も叶わなくなっていった。